

生誕100年 名作絵本シリーズ新装刊行

美術史の中のいわさきちひろ 松本猛

今年はいわさきちひろの生誕100年にあたる。ちひろ美術館では数年前から準備をし、ちひろの新たな魅力を発信する計画を練っていた。

今年の展示では「Life展」と銘打って、生命、生き物、人生、生涯、生活、くらし、活気、生きがいなどをテーマに、ちひろと意外なアーティストたちとの連続コラボレーション企画を立てた。現代美術・インスタレーションで注目される大巻伸嗣、人体の動きに反応する映像を作るインタラクティブメディアアーティスト pikipiki、原爆の遺品シリーズ「ひろしま」が話題になった日本の代表的写真家石内都、多様な表現活動を行うファッションデザイナー飛田正浩が主宰する spoken words project、プロダクトデザイナーも行う若手建築家集団トーフ建築設計事務所、長い間近くで仕事をしていた

がらちひろとは接点がなかった詩人の谷川俊太郎、社会の中の「家族」や「女性」を問い続ける若手写真家長島有里枝らが「いわさきちひろ」とは何かを考え、展示を作る。

7月には東京ステーションギャラリーを立ち上げ館とした生誕100年特別展「いわさきちひろ、絵描きです。」が開催される。この展示では、開催館の学芸員などが共同研究を進め、画家いわさきちひろの再検証を行う。現在、展示準備は最終段階を迎え、私も一部を執筆した解説などがほぼ書きあがった。若手研究者の視点には、美術史の中にちひろを位置づけようとする意欲的な姿勢がうかがえる。

私自身は、昨秋、講談社から評伝「いわさきちひろ 子どもへの愛に生きて」を上梓した。これはちひろ美術館をつくるから40年間の研究の集大成として、構想から再調査、執

筆まで3年半をかけたものだ。

この他にも、今年には新聞、雑誌などのちひろ特集が目白押しである。生誕の地、福井県越前市（武生）では「ちひろの生まれた家」記念館が昨年整備、拡充され、今年特別企画展を開催している。秋からはそれとは別の、規模を大きくしたちひろ展も開かれる。さらに、11月からは劇団前進座の公演「ちひろ―私、絵と結婚するの―」が東京を皮切りに全国を巡回する。

このような動きは、生誕100年というメモリアルイヤーだから展開されていることは間違いないが、それだけではない要素もある。いわさきちひろは55歳で他界しているのに、今年で没後44年を迎える。美術の世界では死後50年を経て作品が世の中に流通していれば歴史的評価が定まるといわれ

る。ちひろの場合は、没後しばらくは、ちひろ美術館以外ではデパートなどの催事場での展覧会しかできなかったが、少しずつ美術館でできるようになり、現在では県立や市立の公立館をはじめ、環境の整った美術館での展覧会となり、評価は高まり続けていると言っている。ちひろの絵本は重版を続け、新しい書籍やグッズの企画などもコンスタントにある。これは、いわさきちひろという画家が、歴史の中に位置づけられつつあることを意味しているだろう。

ちひろが歴史になってきたからこそ、若手の作家や研究者が自由に「ちひろ」を解釈し、扱うことができる。私の評伝執筆の場合も、関係者がほとんど他界したことが気兼ねなく書けた理由の一つだった。また、いわさきちひろが母親であるという感覚を離れて、一人の画家の生涯を調べるといふ面白さを味わえたのも、没してから長い時間が経過していたからに他ならない。

おやゆびひめ

アンデルセン 立原まゆみ いわさきちひろ



新しい新刊に出版される『おやゆびひめ』、『しらゆきひめ』『あおにとり』『はくちょうのみずらみ』も同時刊行される。

この度、いわさきちひろの4冊の絵本が新装版として講談社から出版された。アンデルセンの『おやゆびひめ』、『グリム』の『しらゆきひめ』、『メーテルリンク』の『あおにとり』、『チャイコフスキー』のバレエ曲の物語『はくちょうのみずらみ』である。ちひろの絵本は至光社で制作した6冊の自作絵本や、やはり自作で、最後の絵本作品となった『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）に注目が集まること多い。それは絵本の歴史の中で、これらの絵本が、物語絵本ではない、絵

で展開するシネボエムのような感性に訴える絵本の先駆けになったからである。しかし、物語絵本に注目することでちひろの原点や別の魅力を発見できることも事実である。

ちひろはこういう一文を残している。

「わたしは、仕事の性質上、たくさんの童話をよむけれど、わたしのすきな童話というのは、あくまでも自分の絵に、都合よくできているものばかりである。詩のようにことばの短く、うつくしく、いろいろなことを思いうかべるのでできる、そんなものがすきである。おひめさまが、どんな着物をきてて、どんな顔つきであるなどと、おとなの小説のように克明にかいてあると、わたしのイメージは、しぼんでしまい、うまくいかない。(中略)たとえ克明にかいてあってもなお、わたしがかきよいものに、アンデルセンの童話の中のいくつかがある。「マツチ売りの少女」とか、いろいろなおひめさま、また魔女たちに、わたしは、それぞれのイメージをつくり、それをすこしずつ発展させながら、なんかいかいたことだろう。なんかいかいても、なお工夫するたのしさを、わたしはいまだに失なわないでいる。」(なかよし社より) 講談社 1996年

ちひろは、若いころから映画が大好きだった。好きな映画は繰り返し見て、衣装や小道具や舞台設定などにも強い関心を示した。戦後、絵を勉強していた時代には舞台美術のアルバイトをしていたこともある。ちひろが、子どもの本の世界に踏み込んだのは、物語絵本を描く場合には、役者も舞台美

術も小道具も監督や演出家の役割も、一人で全部考えることができたからだろう。

アンデルセンを好んだのは、作品が好きだったことはもちろんだが、現存の作家との仕事の場合、細かな注文が入ることがあり、それが嫌だったということも関係している。その意味では、昔から語り継がれてきた物語などは描きやすかったはずだ。ちひろへの物語絵本の依頼は日本の昔話よりもヨーロッパの物語の方が多かった。それは編集者がちひろに、美しく、かわいいお姫様を描いてほしいと期待していたからである。たしかにちひろの描くお姫様は清楚でかわいらしいが、ちひろ自身は、お姫様より、敵役の魔女や魔法使いや、わき役の庶民を描くのを楽しんでた。そこでは、きまぐれな人間の個性や性格を描き出せたからだ。

今回、出版された4冊はちひろが40代後半から50歳に描いたもので、脂が乗りきっている時代の作品である。中でも『はくちょうのみずうみ』は、チャイコフスキーが好きな作曲家の一人であり、バレエの『白鳥の湖』も好きだったことから力を入れて描いている。舞台となる古城はヨーロッパスケッチ旅行の成果が生かされ、人物の表現では手や目の表情に工夫を凝らして、ドラマティックな場面を演出している。悪魔によって昼間は白鳥に変えられているオデッサ姫に恋をしたジークフリート王子が、舞踏会で、オデッサに化けた悪魔の娘に求婚してしまった場面では構図の工夫が見られる。ジークフリートが「お前は誰だ！」というように悪魔の

娘を指さすところでは、腕に白鳥のシルエットを重ね、悲しみの言葉を残して飛び去って行くオデッサを暗示した。次のシーン、激しい風が起ってろうそくが消え、広間が真っ暗になり悪魔が勝ち誇った笑い声をあげる場面では、前場面の悪魔の娘の黒いドレスの色を、城の外へ雲のように大きく広げ、空に巨大な悪魔の目を描いてドラマティックな幻想的場面を作った。ページの展開を考え、にじみを大胆に使った色彩と構図の流れは音楽を意識し描いたものだろう。

ちひろの物語絵本を見る場合、演出家いわさきちひろを意識すると、ちひろの違った才能が見えてくる。また、この時期の作品は鉛筆線の表情が豊かで美しい。鉛筆の腹を使った柔らかな線は、髪の毛や服を心地よく表し、尖った線との対比を見るとその技術のレベルがわかる。

今回の絵本シリーズは、造本にこだわった愛蔵版も制作され、文字も小さく漢字が使われていることから、幼児向けというよりは、大人がちひろの絵を楽しむ要素が強いといえる。19世紀末のイギリスの豪華版絵本も、日本の絵巻物も、江戸の絵草紙も大人が楽しんでた。大人が自分のために楽しむ絵本がもっと出てきてもいいのかもしれない。もっとも、自分の大切な絵本を、ひざに乗せた子どもや孫に読み聞かせるのもいいだろう。

生誕100年のさまざまな企画を通して、大人が絵本を楽しむきっかけが生まれればうれしい。

(まつもと、たけし 美術評論家・作家・ちひろ美術館常任顧問)



『はくちょうのみずうみ』でジークフリートが悪魔の娘を指さすシーン